

現代日本語表記に漢字は不可欠なのか

日本語点字研究との関連を中心に

中野真樹

1. はじめに

日本語点字の表記についての学会発表などをおこなった際、かなりの頻度で、質疑応答の時間やその後の懇親会で「かな専用文だと同音異義語でこまりませんか」という質問がでる。しかし、「同音異義語でこまる」とは具体的にどうこまるかがよくわからない。たとえば墨字日本語文であっても小学校低学年用教科書等はかな専用文でかかっている。これについては「難解な語がつかわれないので、耳で聞いて理解できるから問題ない」などと説明される。それではいったいかな専用文にあらわれてこまる語とはなにか。また、同音異義語であっても文脈で判断が可能であるともいわれているが、「困る」としたらどの語がどのような文脈でまぎれやすいのか。日本語文のなかにどれだけ「難解な語」が文章中にあらわれたとき、かな専用文の可読性がはばまれるというのか。と、といかえずと具体的な同音異義語でこまったときの体験談等がしめされることはなく、「素朴な直感からくる疑問」であると説明される。

「かな専用文では同音異義語でこまる」というとき、それは「日本語文の表記には漢字が必要不可欠である」という「日本語表記漢字不可欠論」に影響されているのではないだろうかとかんじるときもしばしばある。この漢字不可欠論については、たとえば雑誌『社会言語学』で掲載されたましこ・ひでのり氏の「俗流言語論点描シリーズ」(ましこ(2002)、ましこ(2003)、ましこ(2004)、ましこ(2008))において、「俗流言語論」のひとつとしてとりあげられ批判的に分析されている。ましこ(2008:107)では、(俗流言語論は)「各人の偶発的な体験にねざした誤解とか、各人の単なるおもいつき、といったランダムな誤謬にしては、一定の方向性にまとまりすぎていてあまりにも不自然だ。これらを定型化した論理のはびこりぐあいをみれば、疑似科学的な構造をもった言語イデオロギーが、公教育と出版資本主義市場を媒介して再生産される「構造」が推定できる。」とのべられている。日本語点字にかんする発表をおこなったあとにでてくる「同音異義語でこまらないのか」という質問についても、個人の「素朴な直感」からでた疑問と解釈するにはあまりにも定型化しており、「漢字不可欠論」に由来するものではないかとおもわれる。日本語能

力試験の点字受験にかんする研究である秋元ら（2014）では、漢字かなまじり文をかな専用文に翻字することで、試験に影響がでるほどに「そこなわれる情報」があると根拠もなく断言する。ここでは、とくに同音異義語や同訓異字が問題にされている。

漢字と仮名を用いて書かれた文章を、表音文字である点字に訳すことによって、損なわれる情報がある。しかし、試験においては漢字を知らなくても文章を理解できるという側面もある。また、現在 JPLT 点字冊子試験では、点訳時に損なわれる情報に対して必要に応じて注釈を付加しているが、注釈によって情報量が増えることが回答に影響する可能性もあろう。

（秋元ら 2014:291）

このような「日本語表記漢字不可欠論」への反論としては、言語学的には漢字の「表意の迷信」「絶対不可欠の迷信」「成功の迷信」などを論じた Unger（2004）が参考となるだろう。「漢字かなまじり文のほうがはやくよめる」「漢字かなまじり文使用者はディスレクシアがすくない」などという漢字幻想については、山田（1991）で論じられている。また、日本語イデオロギーという観点から漢字不可欠論を分析したものには、さきあげた「俗流言語論点描」シリーズ等が参考となる。しかし、それではいったい漢字不可欠論はいつうまれて、どのような論を展開し、どのようなひとびとによってひろめられ、社会にどのような影響力をおよぼしたのか、という考察は十分になされているとはいいがたい。これらの解明は、たとえば言語の研究者までもが学会発表の場で「かな専用文では同音異義語でこまりませんか」と質問するほどに浸透している「漢字不可欠論」を相対化するためには、ある程度有用であろうとかがえる。

また、ましこ氏の「俗流言語論点描」シリーズが発表されてから 10～20 年ちかくたつが、現在漢字不可欠論をとりまく状況はどのように変化したのか（あるいはしていないのか）考察するとともに、落穂ひろいの漢字不可欠論にまつわる言説についての考察をおこなうことを本論の目的とする。

2. 論点の整理

ひとことで「日本語表記漢字不可欠論」といっても、その主張にはさまざまな段階がある。「漢字かなまじり文でないと“まともな”日本語文をかくことは絶対に不可能である」などといった強い主張から、「たしかに、外国人などには漢字の習得は

難しいといわれているが、一度おぼえてしまえば便利なので、漢字は必要である」とか、「かな専用文で日本語をかくことができることはしている。しかし、漢字かなまじり文のほうがよみやすく、はやくよめて、よみまちがいもすくない。だから漢字かなまじり文を廃止するべきではない」などといった漢字不要論にも一定の配慮をしつつ、漢字かなまじり文の優位性をとくものもある。さらに漢字を「不可欠である」とする根拠にも、さまざまなものがある。以下に、これまでによみ・きいたことのあるものを記憶のかぎりまとめた。

漢字かなまじり文をつかうと

- ・ はやくよめる
- ・ 文字の音がわからなくてもかたちをみれば意味が推察できる
- ・ 漢字使用圏の他言語使用者と筆談でコミュニケーションができる
- ・ 同訓異字などで文章があじわいぶかくなる
- ・ 学習障害がおこりにくい
- ・ 漢字・漢語圏のひとと文化のつながりができる
- ・ 漢字は日本の心（文化）
- ・ 漢字はおもしろい

漢字をつかわないと

- ・ よみにくい
- ・ 同音異義語でこまる
- ・ 語のきれつづきがわからなくて誤読がおきる
- ・ わかちがきがむずかしい
- ・ 自然と漢語をつかわなくなるから日本語全体の語彙量がへる
- ・ 漢字のたすけがないと後世のひとに文章の意味がただしくつたわりにくくなる。
(源氏物語などの中古和文)
- ・ 文字数がおおくなるので紙のムダである
- ・ 日本語コーパスがつかれない
- ・ 漢字かなまじり文でかかれた過去の文献をよめるひとがへる
- ・ なまけ者がふえる

漢字不可欠論をとるひとはこのなかからいくつかの根拠をくみあわせて論を補強することをこころみる。このなかには言語学的な検証が不可能なもの(「漢字は日本の心」)もあるが、言語学的に検証が可能であって、すでに否定されているもの

もまじっている。また、まだ検証がおわっていないのにあたかも事実であるかのようにかたられている場合もある。

そして、漢字不可欠論をとなえるひとのもつ社会的役割によってどの根拠をとり入れるかというのには一定の傾向がありそうである。影響力のある漢字不可欠論支持者としては、おおきくわけて文学者、文筆家、言語教育（国語教育、日本語教育）にたずさわるひと、言語政策にかかわるひと、そして言語の研究者（言語学者、日本語学者、中国語学者）、日本学研究者に分類することができるだろう。たとえば雑誌月刊『しにか』の14巻4号（2003年刊）で「日本人にとって漢字とは何か」という特集がくまれている。そのなかで鈴木孝夫（すずき・たかお）と紀田順一郎（きだ・じゅんいちろう）、阿辻哲次（あつじ・てつじ）による鼎談「現代日本と漢字」が掲載されている。このなかで、以下のようなやりとりがある。

阿辻 実は漢字かな交じり文というのは、われわれの文化の根源に深く根ざしている表記形態ではないか。（略）日本語を書くときに漢字かな交じり文でないと自分の気持ちをうまく表現できないという漢字と日本語との問題、それを言語学的に分類していただくところのようになりますか。

鈴木 言語というのは音なんだというのが近代のヨーロッパ言語学の大発見であり、事実そうなんです。（略）ところが、これは日本語だけにはあてはまらないのです。

（鈴木ら 2003:15）

ここでは、「漢字を中心とした文字文化史を専門」とする阿辻と「言語社会学を専門」とする鈴木のそれぞれの専門分野からの漢字不可欠論へのアプローチをおこなっており、両者の属性により期待される役割分担がある（両者の専門分野については、記事の最後に記載された著者のプロフィールをそのままかりている）。このように、漢字不可欠論をとなえるひとの主張はさまざまである。そして前述のように漢字を不可欠だとするその論拠も多様化してきている。初期からある漢字不可欠論の例としては、小西信八（こにし・のぶはち）が1899（明治32）年に『前島密君国字国文改良建議書』のなかで、「漢字御廃止之議」として紹介した文のなかには以下のようにある。

橋(ハシ)箸端(ハシハシ)の混雑あるへく又「霞(カスミ)そ野辺(ノヘ)の香(ニホヒ)哉(カナ)」を「カス。ミソ。ノ。ヘノ。ニホヒ。カナ」と誤読する如き句切りを愆る恐ありなと非難仕候者も可有之候得共是等は文典を制し

辞書を編し句法語格接文の則を西洋諸国に規制のものと御国固有の者とを
参酌折中して御制定相成候ときは毫末恐るゝに足らざる儀にして

(小西 1899:14)

ここから、明治期にはすでに「同音異義語がまぎれる」「語のきれつづきがわからなくて誤読がおこる」といった議論がおこなわれていたことがわかる。一方、「かな専用文では形態素解析ができずに日本語コーパスをつくれぬ」などというのは、新しい議論であるといえるだろう。このように、どのようなひとが漢字不可欠論に参加し、どのような論がいつから展開され、どのように浸透していったのかを整理していく必要があるのではないかとかんがえられる。

また、漢字不可欠論は基本的には漢字廃止論への対抗論である。そのため、漢字廃止論者との議論の蓄積がある。ふるくはたとえば新聞に掲載された「かなのくわい」への反対論と、大槻文彦によるそれへの反論をまとめた清水連郎編輯『かなのくわい 大戦争』(1883(明治16)-1885(明治18)年)や大槻文彦著『復軒雑纂』(1902(明治35)年、慶文堂書店)所収の「仮名の会の問答」等がある。また現在みられる漢字不可欠論もまた、漢字廃止論への反論という形をとるものがおおくある。漢字不可欠論について分析をする場合、同時に漢字廃止論がどのような論を展開していたかについても考察する必要がある。

3. 現在の漢字不可欠論の特徴

2014年に、『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』というタイトルの本が出版された。これは2011年に国立国語研究所の主催でおこなわれたフォーラムをもとにしている。この本は、国立国語研究所の所長によるまえがきがあり、そこには以下の記述がある。

アルファベットや仮名は表音文字、漢字は表意文字であると言われていますが、この区別は私達の脳の活動からすると、非常に重要な意味合いを持っています。文字を目で見えて読む場合、平仮名ばかりで書かれていると、いったんそれを言葉として読んでから、意味を解釈することになります。このぶんのようにひらがなばかりでかかっているぶんしょうをりかいしようとするとき[この文のように平仮名ばかりで書かれている文章を理解しようとするとき] 私たちの脳は、まず、どこからどこまでは句切れになるのかを見極め、その後で、まとまりをつなぎ合わせながら意味を解釈していくという二段構えの操作を強い

られます。平仮名ばかりの文章が読みづらいのは、そのせいです。他方、漢字の場合は、ぱっと見ただけで意味が読み取れ、脳の処理は一回で済みます。この違いは、脳科学や神経心理学の実験でも証明されていることです。

このように、複数の文字種を機能的に共存させているのが日本語の独創的な工夫であり、これは意思伝達の効率性という観点から非常に優れた仕組みであると考えられます。

（影山 2014：4）

ここで、「脳科学」「神経心理学」などの科学風の根拠がだされているのが従来の漢字不可欠論にはみられなかった特徴であるが、かな専用文はわかちがきをするという前提がふまえられておらず、ましこ氏がくりかえし指摘している言語イデオロギーや疑似科学の再生産となっている。

そしてこの本に収録されている阿辻（2014）では漢字不可欠論の最初期から連綿とつづく「同音異義語で誤読がおこる」論があらわれる。

電報ではカタカナしか使えなかった。しかし日本語には同音異義語がたくさんあるので、カタカナだけで書かれた日本語は非常に読みにくいものとなりがちである。単に読みにくいだけならばがまんすればいいだけだが、困ったことにカナだけ書かれた文章には誤読の可能性が往々にして発生する。

（阿辻 2014:27）

この後、「キシヤノキシヤ、キシヤデキシヤス」や「フタエニマゲテクビニカケルジュズ」「キョウハイシャヘイツタ」などの例があげられる。これは、明治期の漢字不可欠論にもみられる「同音異義語でこまる」「語のきれつづきがわからない」という主張であり、現在も継続してつかわれている論である。しかし、かな専用文やローマ字文で日本語文をかく場合は、語や文節でくぎるわかちがきをおこなう。また、同時に漢語制限を主張することもおおい。つまり、「語のきれつづきがわからずに誤読がおこる」であるとか「同音異義語でこまる」というのは、漢字廃止論者の主張を一部しかふまえていないことになる。ただし、ここではその後、以下のようにつけくわえられている。

もちろん、仮名で書く時は単語ごとに分かち書きをするとか、同音異義語をなるべく使わないというように、読みやすさに対する工夫が提言されてはいるが、それでも全体として読みにくい文章であることにはかわりはない。

(同 : 28)

ここにあるように、「わかちがき」をするという漢字廃止論者からの反論にたいして「読みにくい文章である」と断定的ではあるがいちおうの応答をこころみていることはたしかだろう。

この本には同時に、漢字不可欠論を批判したカイザー（2014）がおさめられており、いちおうみかけ上は両論併記の形をとってはいるが、両論の間で有用な議論がおこなわれているわけではない。ましこ（2003：57）において、漢字問題について「議論が堂々めぐりで、言語学等の知見は結局無視されて立論がくりかえされている」と指摘している。漢字不可欠論者から反論をこころみる様子は一部では見られるが、その状況はいまだ大きな変化はみられない現状がある。

また、この本の編著者は多くが国立国語研究所の研究者である。自身が直接漢字不可欠をとええる言語研究者が存在し、シンポジウムを開催し、講演や論文という形で漢字不可欠論を発表する場を提供するというのも言語の研究者の漢字不可欠論への参与の方法として注意しておく必要があるだろう。

4 . おわりに

現在、「同音異義語でこまる」というのは漢字不可欠論のなかでも中心的な位置にある根拠であるといえる。現在、日本語漢字かなまじり文と日本語点字文、ローマ字文などといった非漢字かなまじり文は現在すでに併用されている状況であり、注意ぶかい漢字不可欠論者は、たとえば阿辻（2014）のように、そのなかでわかちがきが実践されているという反論を想定しているため、もう一方の主流となっていた「語のきれつづきがわからなくて誤読がおこる」をもちだすのは慎重になっている。しかし、同様に「同音異義語で誤読がおこる」論についても、日本語点字文は明治期から継続して政府公文書や教育、行政サービスなどの文書のなかでひろく使われてきたかな専用文である。その表記と文字文化にたいして、配慮が欠如していたという批判とはなっても、それが漢字不可欠論の根拠とはならない。もし「同音異義語で誤読がおこる」という問題があるのであれば、点字使用者の表記とその蓄積の歴史を考慮し、同音異義語のやりだまにあげられることのおおい漢語にたいしての制限をかんがえるべきであろう。

現状では、日本語学表記論研究者であっても、一般読者むけの新書などで漢字不可欠論に賛同してみせたり、それどころか専門書であってもむかしながらの漢字不可欠論があらわれる場合もある。とはいうものの、近年「やさしい日本語」などが

着目をあび、漢字論について言及する時、その習得のむずかしさについてふれないですませることはむずかしくなっている。現在つよい漢字不可欠論よりは、「漢字かなまじり文のほうが、漢字をつかわないかな専用文やローマ字文よりも可読性ですぐれている」という「漢字かなまじり文優位論」が主流となっているといえるだろう。つまり、「どうしても仕方がない場合はかな専用文やローマ字文などを許容するが、（マジョリティのための）おおやけの場や、「健常者」への学校教育での日本語文の表記は漢字かなまじり文が主でありつづけるべきである。日本語文とはふつつ、漢字かなまじり文のことをさすのである」という主張である。そうであれば、「漢字かなまじり文と非漢字かなまじり文はどのように共存するか」という議論がすこしはやりやすくなっているとはいえる。

最後に、漢字不可欠論の役割についてのべる。おおくのものはずでに反論がおこなわれてはいるものの、「脳科学」「神経心理学」「日本語コーパス作成」といった新しい論拠については、今後検討していく必要がある。また、伝統的な「同音異義語でこまる」論についても、漢字かなまじり文でよまれることを前提としてかかれた日本語文を日本語点字に翻字したり、音声でよみあげたりする場合には、なんらかのよみづらさが生じる可能性は十分にかんがえられる。漢字不可欠論の根拠としてだされたものうちいくつかは、それらを検証するための仮説として有用であろう。しかしながら、それは現段階では「これから検証されるべき」説であり、現段階では漢字不可欠論を補強するものとはならない点に留意する必要がある。

引用文献

- 秋元美晴（あきもと・みはる）ら 2014「点字使用者の日本語学習に関する調査 日本語能力試験点字冊子試験受験者の日本語学習」『恵泉女学園大学紀要』26
- 阿辻哲次（あつじ・てつじ）2014「漢字とどうつきあうか」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』（彩流社）
- シュテファン・カイザー 2014「漢字の魅力にひそむエンドレス感と西洋世界の漢字学習「システム」」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』（彩流社）
- 影山太郎（かげやま・たろう）2014「まえがき」『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』（彩流社）
- 小西信八（こにし・のぶはち）1899『前島密君国字国文改良建議書』
- 鈴木孝夫（すずき・たかお）、紀田順一郎（きた・じゅんいちろう）、阿辻哲次（あつじ・てつじ）2003「特別鼎談 現代日本と漢字」『しにか』14-4
- ましこひでのり 2002「現代日本語における差別化装置としてのかきことば 漢字表記を中心に」『社会言語学』2

ましこひでのり 2003「近年の俗流言語論点描 おもに言語研究者の本質主義をめぐって」『社会言語学』3

ましこひでのり 2004「近年の俗流言語論点描(その2) 最近の漢字表記論/英語教育を中心に」『社会言語学』4

ましこ・ひでのり 2008「日本語ナショナリズムの典型としての漢字論 近年の俗流言語論点描(その5)」『社会言語学』8

山田尚勇(やまだ・ひさお)1991「文字論の科学的検討」『学術情報センター紀要』4

吉田澄夫(よしだ・すみお)、井之口有一(いのぐち・ゆういち)1972『明治以降国語問題諸案集成 語彙・用語・辞典・国語問題と教育編』(風間書房)

Unger, Marshall J. 2004. Ideogram: Chinese Characters and the Myth of Disembodied Meaning, University of Hawai'i press